

私はコッコロ  
女神アメス様より  
主さまのお世話を  
任じられております

美食殿での生活も長く  
皆さまとの絆も  
深まってきており

特に主さまとは…

昨夜の夜も…



沢山のキスを  
していただきました

もう幸せで幸せで…

ほけ

ドキ

ドキ

この先も主さまと  
ずっとずっと  
歩いていきたい…

だからコッコロは  
頑張ります！



もっと

もっと

「やあ、君が今日から  
働いてくれる子だね」

「はい、コッコロと  
申します」

「待っていたよ」

「早速案内しよう」

主さまのために…

「あの…この匂いは何で  
かおもしろい…  
とても甘い…」

「ちょうど今、料理の  
真っ最中でね」

「その匂いだよ」



「デザートか  
何かでしょうか？」

「ああ、とてもいい  
食材が入ってねえ」

「今から「孕ませる」  
所なんだ」



なんででしょう…

「それはどういう…」

とても…眠く…



『やあ、お目覚めかい』

『…い…依頼主さま  
これはいったい…?』

は、

は、

『私も美食家でねえ』

『君のような  
育ち盛りの子を  
頂くのが  
大好きなんだ』

『特に成熟しきっていない  
果実を食すのが  
至上の喜びでね』

『言ったであろう?』

『とても良い食材が  
手に入ったとね』

『それは君のことだよ  
コッコロ君』

『う…動けない…力が…』

『まさかあの香りは…』

『その通り、牝を痺れさせ、  
快楽を与えてくれる…  
いわば媚薬だ』

『私のはとても  
大きいからねえ』

『だが時期に  
気持ちよくなる』

『びっ!!』

『では頂くとしよう』

『まだ熟してない  
極上の果実』

『おやめください!!』

『入るわけが…!!』

『ククッこのピッチリ  
閉じて拒んでいる割れ目』

『ランッ!』

『これ待ち望んで  
いたのだよ!!』

『ぬおおっ!!』

『あぁっ』





『ヌウウウんっ!!』

『あああああ...っ!!』

『素晴らしい!!』

『実に素晴らしい  
締め付けだ!』

『...そんな...』

『初めては...  
主さまに...』

『心配せずとも、  
これからは私が  
君の主だ』

『いや...いやで  
さいま...す...!!』

『少し早いが奥も  
ほぐさねばな!』

『あ...っ...やあ...!!』

『ククク、いいぞ』

『抵抗する意思と  
肉棒を押し出そうとする  
肉壺、どちらも  
イキがよい!』

『くる...し...っ!!』

『主...さま...っ...』





『フンッ!!』

『フンフンッ!!』

『……やああつっ!!』

『フン……っ!!』

『“あ”あ”あああつ!!』

『私の剛直をここまで加えこんでくれるとは実に素晴らしい!』

苦しい…アソコが…私の中が引っ張り出されて…  
しまいそうです…っ

それなのに…っ突かれるたびに、  
どんどん熱くなってる!!

『わかるだろう? 子袋の入り口をこじ開けているのが!』

『ここが、牝の一番美味なところなのだよ!』

『そんな…』  
『こと…っ』  
あああつ…  
何かが…  
昇ってきて…

『ラン!』  
『声もいやらしくなってきた。媚薬が効き始めて来た頃か』

この感覚、  
怖い…のです  
主…さまあ…っ!!





『なら君の子袋はもう  
私の子種を受け入れる  
準備ができている頃だ』

『お待ちください!』

『だめっ!!』

『たっぶり  
射精させて  
もらおうじゃないか』

『君に使った媚薬は  
協力だね』

『それだけは...!!  
それだけは  
ゆるしてください  
ませっ!!』

『なら、今から私が君の主だ!!  
安心して受け取りたまえ!』

『新しい「主」の子種をなっ!!』

『言っただろう  
君を孕ませると!!』

『今こそ、君のように  
未熟で無防備な卵が  
子袋に向かっている  
ころだろうよ』

『新しい「主」の子種をなっ!!』

『たっぶり  
射精させて  
もらおうじゃないか』

『君に使った媚薬は  
協力だね』

『新しい「主」の子種をなっ!!』







「とりあえず続きと  
行こうじゃないか」

「君の子袋は  
どれくらいで  
堕ちるかねえ？」

「楽しみだよ」

「くおおおっ 孕めっ!!」

「孕めえっ!!」

「あっ!!」

「あああっ!!」

「ふう、たっぷり  
受け止めてくれたねえ」

私の中に：  
…熱いものが  
一気に流れてきて…っ!!

『でもまだ始まったばかり』

「ハハハハハっ!!」

「おははは」





—その後も—

私は犯され続けました…

何度も…

何度も…

おびただしい量の  
子種を私の膈内に  
放って来たのです

主様に捧げるはずだった  
大事なアソコに

あの黒くて  
太いモノが  
入ってきて…

はー♡  
はー♡





——どれくらい時間が  
経ったのでしよう——

私の体はとっくに  
限界を迎え

指を動かすことも  
できないほどに  
なっております

ですが男は反応の  
なくなった  
私を持ち上げ

勢いよくアソコに  
おちんちんを  
叩きつけてきたのです

赤ちゃんの部屋の  
入り口を打ち付ける  
衝撃と快楽に

私は堪らず叫び声を  
上げるしかありません  
でした

そして私の赤ちゃんの  
部屋はこじ開けられ…

オオオオオオオ

オオオオオオオ

オオオオオオオ

オオオオオオオ

オオオオオオオ





受け止めきれないほどの  
子種を吐き出してきたのです

薄れていく意識の中…

赤ちゃんの部屋の  
奥にある大事な  
ものが…

主様以外の子種に  
包まれていく恐怖に  
怯えながら  
意識を手放しました…





そして

『孕め!!』



主様の「子種」を受け入れるはずだったソコには

激しい行為で醜くめくれた「膣内」と

常にお腹が膨らむほど注がれた大量の「別の子種」...

この数日間私のアソコに子種が入ってない時間は存在してありませんでした

『孕んだ』...と

こんな汚れ切った体では主様のもとに戻れない...

そう諦めたとき... 下腹がチクリと痛んだのを感じたのです...

コッコロは... もう...

